

日本のユートピアと政治経済学の 史的概略——近世を中心に

林 喜代三

序——前近世から

元禄期の商工業の著しい発達の後頃東北の八戸で医業を営む安藤昌益が既成社会及び既成教学の包括的な批判の書を著わした。独創的な思想を内に含む『自然真営道』は、長くその存在を忘れられていた⁽¹⁾。世には忘却されないし秘匿されたままの著作、まして思想そのものは多いかもしれない。近世でも昌益の例に限らず多いかもしれず、また実践家・実務家の思想はあまり著作として残されなかり。まして近世以前には後世に現われない著作・思想は多いと予想される。さしあたり現存の知られた著作の中に「政治経済学批判」の視点から重要と思われる思想とそれとの関連で社会＝歴史の「ユートピア」像とを概略する⁽²⁾。本論では近世＝徳川期に主に限定する。

人類の存在とともに生活があり経済があり、そして経済思想が生ずるが、それが文章に表現されるのは人類史の極く最近に属する。前近世では未だ独立して展開された政治経済的著作は知られておらず、宗教的・文学的な著作などの中に垣間みられる思想の断片として残されているにすぎない。経済生活が単純である間は経済論も単純であり、それを純粹に独立して論ずる要求は生じない。またそもそも一般に書物が当時著わされ残されたのはいかなる意図・効用があつてのことなのか省察されねばならない。支配者の側の政治的意図や特権階級の慰みのためなどでなければ、貴重な書物など作られなかつたであろう。いわゆる古典とされて現在に残っているのも果して何故にかを熟慮してみれば、視点により各種の有用性はあるにしても、現代の水準からどれほどの絶対的な価値があるかは疑わしいかもしれない。むしろ古典として權威を持つ故

の権威でしかなく、冷静にみれば「裸の王様」⁽³⁾なのかもしれない。時代を考慮しての条件付きの評価ならともかく、余りに権威をうのみにした過剰な讚美は、自らの知的怠惰を表わすにすぎない場合がある⁽⁴⁾。

序の1. 大和民族＝単一民族説が常識化されるようになったのは歴史的に最近のことで、日本人は元来混合民族⁽⁵⁾である。日本列島は地理学的環境から流入するのみで出るを得ない。殊に古代は絶えず先入民族と新入民族との争いで、征服集団による支配と被征服集団の服従ないし抵抗の歴史であったろう。相対的に優れた文化をもつ支配者集団・民族と共に、文字や思想も流入した。単に文化のみ、ないし文化人のみが一部入ってきたわけではない。仏教や儒教もその例であろう。伝来した仏教は一部特権階級のもので、民衆に布教した端緒も支配の具としてで、国分寺の建立はその著例である。当時は民族支配で、征服された者は奴隷に等しい。戸籍の作成も本来収奪のために、逃れてそれに入らず流浪ないし抵抗する民の存在はその後まで長く存続したものと思われる⁽⁶⁾。

儒教は元々実践的で聖人の理想を説き、仏教は西方に極楽浄土を説くが、これらに対し被支配集団の側から産み出された痕跡のあるユートピアとしては東方に想定される常世の国⁽⁷⁾のイメージがある。それは史的により空間的にイメージされていたと思われる。現世の陰画としてのユートピアは過去や未来の世に想定されることもあり、別世界に想定されることもある。そして現世を批判する基準の役を果すことにもなり得る。

序の2. 荘園を中心とした収奪・支配形態から地方分権が強まり、中世には前代の思想の普遍化と再び大陸からの流入（朱子学中心に陽明学・禅宗など）があり、現実の封建社会に適応した形に改造される。民衆の側には前代の空間的なユートピア像に対し「ミロクの世界」⁽⁷⁾を時間的に待望する信仰が知られる。ユートピアも現世を諦視させるのみのものとその改革を要請するものがあり得る。

源平の争乱期と中世末期の戦国期には再び不服従集団の抵抗が活発になった。戦国期を無秩序とのみみるは誤りで、経済社会の発展が顕著な中でこそ争乱が続き得たのであろう⁽⁸⁾。足利末期から織豊期には近世的な傾向が増大し、農業方面だけでなく商業方面へも経済現象が著しくなる。いわゆる武士道も後

世に観念されるような実体のない奇怪なものでなく、もっと泥くさく、しかももっとドライで契約的な意味であったろう。

近世——経済論の展開

戦国期前後の著しい発展の後に徳川期の着実な商工業の発展がもたらされる⁽⁹⁾。そこで比較的独立した経済論の輩出がみられるようになる。最初は大陸思想からの流入で、しかもその消化のないままの多いが⁽¹⁰⁾、観念としては復古を説いて現状を批判し、實際上未来への進歩を結果させるパターンは初期から多い。——洋の東西・歴史の古今を問わず、近世には観念としての「伝統主義」が身分固定と安分を求めたが、事実としての発展がその動揺を惹起していた。社会経済の発展・経済組織の複雑化は経済についての議論を活発にする。思想はその時代と社会状況に規定される。

幕藩体制とは藩の連合体制という面も強く、クニとは藩をさし、それに対するのは天下であった。ヨーロッパ諸国とその全体との関係に類似する⁽¹¹⁾。中央集権と地方分権の拮抗は幕府と各藩の間のみならば、各藩の中でまた同じ状況がある。幕府の政策による参勤交代や土木事業などは当時事実として重商主義的な効果をもたらしていた。藩札の発行なども同様であり、現実において幕藩体制の中で資本の原始的蓄積が結果した。幕末に殊に高まった攘夷の旗印も、日本の運命などということからではなく、実力をつけた諸藩が自ら代って幕府を開かんがためであった。例えば薩長も水戸も同じである。日本全体として1つの国と観念されてくるのは対外的な危機を通じてで、維新へと事実の力によって強制されてくるに他ならない。

幕末に神田孝平が自由主義経済学者イリスの *Outline of Social Economy* を蘭訳より重訳して『経済小学』とした時より、Political Economy や後の Economics が経済学と称されてきている。徳川期の「経済」論考は政治論・時務論で、時事問題をとく政策論であり、経済という言葉は政治経済社会全般に亘る意味をもつ。未分化で、たとえ経済篇と政事編の分かれた著書でも前者が系統ある経済論の原理原則を展開している訳ではない。経世済民ないし経国済民の論であった。欧米でも元々経済学の定義は、例えばスミス『国富論』に

明示される如く、政治経済学であった。全体考察の学としての伝統を一面として持つもので、他の英国やヨリ前の仏の論者の場合なども同じである。リカード等を経てマーシャル等のいわゆる近代経済学の勃興を一画期として科学化され洗練されてきた。日本でも同様で、またマルクス経済学の場合には複雑な様相を呈しながらも科学化の波が圧倒的である。現代ではむしろ「全体考察」の学としての伝統面が見直さるべきと思う。

1. 近世には経世論が百家争鳴の状態⁽¹²⁾、中心は儒学が、殊に身分秩序を固定する体制の正当化・安定化イデオロギーとしての朱子学が、幕藩体制という現実の社会的秩序の維持に好都合なイデオロギーの役割をそれなりに果たしたと思われる。幕末には逆に反体制イデオロギーの源の一つともなる。また元来在野的傾向のある陽明学が現われ、更に儒学以外に多様な思想的活動が表面化した。もっとも朱子学が幕府の正式の官学となるのは寛政異学の禁からで、形式上長く林家の私家学にすぎなかった。が林家の私塾を幕府の学校として昌平坂学問所となったのは、近世後期におけるその地位の動揺をむしろ裏書きしよう。

元来儒学は現実社会を論ずるもので、この時期経世論が活発な展開を示したが、多くは支配者に経世済民の道を説くものであった。それは当時一般に経世済民の論として政治学であり、経済之学・経済道・経済術と称され、実際に行なうべき規範を明らめ、具体的には君主ないし政治家が国を治め民を安んずる手段を論ずる政治・倫理の学であった。大陸思想の影響で政治学はその根本思想を倫理におき⁽¹³⁾、その理想的人格は聖人であった。経済学とは仁政を主眼とする社会政治学に他ならず、貧民の救済を政治経済の目的とし、殊に小農の保護と大農化の阻止を治者の主たる義務とする貧民救助の策を、主要題目とした。一種の社会主義思想ともいえ、近世前から既にみられるが、体制護持の観点からのものである。

商工業の発達が未だしの農業国で、農本主義が唱えられ、商工業の排除が説かれるが、商工業の成長の事実とそれによる体制危機の増大を逆に証するものでもあった。節約論を説き奢侈禁止を唱えるが、それは逆に事実上資本の原蓄のための重商主義的進展を示す。批判の見地は観念上の古しえの理想の世に

求められ、貨幣経済のない太古の自然経済への復帰が主張される。復古的思想に基づく実状の批判である。徳川期を通じてこの傾向は強く、初期では熊沢了介(蕃山)⁽¹⁴⁾が好例である。理想の社会像(ユートピア)の構想と既成社会批判(経済論)とは当時にも多く存する。

鎖国政策は幕府による貿易統制・独占の面もあり、また当時の日本はヨーロッパ全体と比較すべきような状況で、参勤交代などが重商主義的效果を生じていた。各種の藩救済策にも拘らず、幕府は各藩の財政的基盤を疲弊させる政策を一貫してとり、参勤交代は継続された。観念と事実的效果のズレが見逃されてはならない。後の田沼の政策なども同例である。資本の原蓄はいわゆる上からの道も下からの道も、いずれもあり得る。

2. およそ頂点はまさにそれ故に崩壊の始まりで⁽¹⁵⁾、近世では元禄期がこれにあたる。古学派の荻生徂徠は観念的な色彩の強い山鹿素行などと異なり、現実の政治に関わることで、町人意識も影響し内在的現実的世界観をもつに到る。近世中期以降の内的矛盾の激化から社会の変質の対応する方向に沿い、むしろ身分社会体制イデオロギーの内からの解体の論理的端緒となる。その思想は実学を促がし、復古主義は国学思想に影響を与える。彼の『政談』や国学の本居宣長『玉くしげ』などは、未だ経世論にも発言したというに留まるが。

徂徠は時弊に対する処方として農本主義と階級論を唱え、古聖人の法による作為による古しえの理想の世への復帰を説く。自然のままでは混沌状態になり、聖人による正しき作為によってこそ良き社会状態が生ずるとする。支配者の側からも被支配者層の意識が無視しえなくなったことを示すが、あくまで上からいかに操作するかの統治技術論である。これに対し、宣長は峻烈な政治の支配する現実と生活者としての意識とのヨリ厳しい接点で被治者側の心情をつかんだ政治を説き、下からの服従心を確保し社会の安定を得るをめざす。上古の理想的な世界の原理を古道とよび⁽¹⁶⁾、ユートピア的な古道観を深化させる。一揆や打壊などの続発とそれらの厳しい弾圧という現実の状況をリアルに洞察してはいるが、治者への要請は心構え論のみで被治者の政治的服従を求める。民衆の立場から生活の安定を追求したが、現実の政治社会の彼岸にあり、これを動かす神意の支配を観念し、それに委ねることで終る。

この後、経世論の分野を本来専門にする学者が多く現われ、儒学・国学・洋学などの既成の学派の枠に関わらない思想が続出する。徂徠の弟子の大宰春台『経済録』『経済録拾遺』は比較的まとまったものの一つで、従来のまとめとその後の発展の準備とを果たす役割をした。商工業の発達を軸に既成社会の矛盾の激化に対し、現実の社会体制を部分的ないし全体的に変革しようとの考えが現われる。一方で農本主義的な見地から、他方で重商主義的な見地から。後者は商工業の発達を推進させる方に力点をおき、平賀源内・本多利明・海保青陵そして佐藤信淵などがある。前者は商品経済の浸透による農村の破壊を防止する考えで、二宮尊徳のように既成の枠の中で農村の破壊を防止せんと現実的な方策を実践する者と、安藤昌益のように無政府・無階級のユートピアを構想し現実の先まで批判の射程に入り得るような論を説く者がある。

3の1. 商品経済が盛んになった高度経済成長の時代たる元禄の世に続く時期に安藤昌益の思想は出た。差別社会たる現実の「法世」から身分差別なき原始社会たる「自然ノ世」への復古を説く。聖人による制作以前の間人は全く鳥獣の如き存在で聖人による作為の社会こそ理想とする徂徠に対し、自然には既に農耕という営み・夫婦という人倫関係がそれ自体として備わり含まれており、聖人の作為こそ差別社会を生んだとする。彼の自然観は聖人の教化以前の原始状態という法家的な自然概念とも人間社会一般からの隔絶という道家的なそれとも異なる。肯定・否定の価値関係は全く逆転しているものの「法」の作為説⁽¹⁷⁾と自然状態の想定とで徂徠と共通する。「道」の成立を法世にみるか自然世にみるかが逆で、聖人の価値と役割が逆転するが、まさにその故に徂徠の作為の論を逆転させれば昌益の論となる。この関係は、自然状態を戦争状態とみて社会契約論をたてるホッブスなどと自然状態こそ平和状態とみてそれを説くロックなどとの関係に類化される。そして昌益は「自然へ帰れ」を標榜する点でルソーにも類比される。

3の2. 『自然直営道』『統道真伝』は当時あって驚くべき独創性を含んでいるが、その一方的な強調は思想の孤立性を強く印象づけることになる。実際その内容の多くは古い陰陽五行説などの陳腐さに満ち、斬新で大胆な包括的批判に比した思考方法の洗練のなさと共に、むしろ個々には多くの先学思想から

の影響が認められる。徹底した平等主義を最大の特色とし、「自然ノ世」を基準に現実の社会「法世」をコシラエゴト（作為）として否定する。聖人が「二別」をもちこみ自然の正しい「道」＝人の本来的な生き方を見失わせているとし、社会における上下の身分差別とそれに基づく生産者から労働の成果を収奪する制度そしてそのような社会制度を擁護する教学思想を徹底して批判する。正しい道は自然界そのもので、それをマコトナル（活真）とよび、それと共にそれに範とるとヒトの営みを「直耕」と称する。直耕は自然の法則であり、その中でヒトは互に同等な構成分子となるとし、二別には「互性」を対置する。自然界の「活真」が営む道即ち自然に行われている理法と、ヒトの生き方との原理的同一性を主張する。

人間は皆平等だとの説は昌益の独創ではなく⁽¹⁸⁾、朱子学などにも共通し、一切の人倫を自然の存在に還元し人間の最も自然な状態は人間が自然の気行の運動サイクルの一部になりきるところにあるとみる。が「自然」に平等をみて貴賤の別を否定する解釈に対し、逆の見方をする例も多く当時はむしろそれが一般であった。例えば当時の民衆の意識を企みに反映させた石田梅岩の心学は、朱子学の通俗版という面ももつが、自然に基づいて人間の不平等性を説き、自然界からの類推により人間社会の永遠の秩序を身分秩序にみる。このような発想が生まれるのも自然で、時代を遡るほど多いが、これはいわば分業による協業の有効性から貴賤の身分差別を正当化する混同であり、ないしその混同をもたらす。

3の3. 昌益において「自然ノ世」像は事実上超歴史的な観点に立つユートピア的社会像の性質をもち、一切の社会制度・思想を批判する基準となっている。かつての自然ノ世は自然の生成と穀物の生産と人類の生殖とが共に一つの直耕として調和し幸福な円環を描いていた時代とし、自然ノ世の簡略なモデルとしては夫婦の人倫をみる。聖人による法の制定・社会制度の成立により不耕貪民が現われ、それが支配的な現実の社会たる法世が出現し、聖人が自然の理法を「私法」化したとみて、現実の社会制度の存続を正当化している既存の学問・思想を包括的に批判する⁽¹⁹⁾。「自然ノ世」が方法的ユートピアとなり、歴史上の一切の社会および思想が批判される。

現存の法世、作為された社会制度の廃棄は、すべての人間、なかんずく上に立つ人間が自然の気行の正しい認識に達した暁にのみ実現するが、現実的な策として「私法盗乱の世に在りながら自然活真の世に契う論」（「統道哲論巻」）を次善の策に提示する。聖人が自然世を墮落させてしまった現状のうちで自然活真の世を求める方法として、上下の差別をもって上下の差別を否定する（誤りをもって誤りを正す）方法、支配者の存続を認め上下の区別のままで各自が直耕することを提唱する。現実性の程度についてはともあれ、一切の歴史＝社会及びその思想の批判の基準としての社会像の構想と現実可能な最大限の社会像の提示という論理構造において、マルクス（「自由の王国」論等）にも類比される⁽²⁰⁾。ただ本来復古の思想を未来に置いたもので、現実の歴史の傾向から未来にそれを超えるユートピア像を構想するには到っていない。

3の4. 社会・思想の一切を批切する昌益も、しかし政治実践的な批判には向わず、また作為の社会のそれ以上のたちいたった分析はなされない。徂徠の場合は体制イデオロギーであるが故に、現実の社会の機構に通じその危機を予見するに對し、昌益の場合は激しい批判的論調とは逆に自然活真の道を自己の生き方との同一性の信念のうちに過ごし、「私法盗乱の世」にありながら、個人の生活の実践で自然活真の世に適う日常をおくっていたものかと思われる。身分差別なき理想社会を描くが、直耕は農耕に限らず活動そのもので、個人における生の充実を求めるに留まり、諸悪の「根」源たる「欲」望を絶つことに努め、夫婦の人倫も個人の次元で実現可能なものとしてあった。作為の否定は自然の概念からのみなされ、反作為の主張が一種永遠の不作為への道に自らを留めること⁽²¹⁾になる。既成の作為の在り方を批判しても、その真の揚棄は更なる作為によって「自然」に適う社会を実現しなければならないのにも拘らず。

ともあれ文字・知識から疎外された農民の土の聲に表現を与え、政治制度からの被疎外者たる耕作農民に自己の思想家としての運命を彼は委ねた。誤りの文字を用いて書物を綴る所以を、すべての文字・書物を捨てて真営の道をとるため、後世のためとする（「大序」）。文字で書かれた書物のことごとくを天真の妙道を盗むための私法としながらも「真営道」を書くのに文字を用いる所以は、すべての古書のデタラメさを論破し真営道を世に現わすためだとする⁽²²⁾。

4. 江戸周辺の学者の多い中に大阪では中井竹山は『草茅危言』で参勤交代制の減少など大名救済策を説くが、諸大名の謀反を恐れ金を遣わせて常に財政的に苦しめておく幕府の根本政策のために、改善はありえなかった。弟子の山片蟠桃は『夢の代』で物価の調節は需給の原則を可とする放任主義を唱え、干渉政策に反対した。

海保青陵の諸経済談も比較的完全な経済書の一つで、商工業発展の急務を説くが、それらを不生産的事実とする点でフィジオクラート等に類似する。徳川幕藩体制は集権制と封建制の二つの矛盾を孕み（まさに近世）、後者の農業経済へと解決の道を求める徂徠に対し、前者の貨幣経済の進展へと解決の道を説く論者の一人が青陵であった。幕藩体制の困難が基本的に商品経済の発展・商業的経済機構の発展に起因することを同じく認識しながらも、徂徠は武士の土着で問題を解決せんとし、青陵は商業資本を肯定し商業的経済機構・社会をより一層発展させて解決せんとする。武士も商業資本主義機構の一員であることの自覚を求める。ただ商人の立場からではなく、社会の基本的体制の維持・存続を目的としてであり、各藩が並立割拠する現状を前提し⁽²³⁾、そこでの問題の解決をめざすのだが。彼は徂徠の弟子の春台からも影響を受けた経済合理主義で、通貨の循環を滑らかにすることの要を説き「経済」という言葉を儒教的経世済民という意味から解放した論者の初めといえるかもしれない。当時経済が自律性を一層確立しつつあった事態を証する。彼は厳密な文献学的手続きによる古典の解釈ではなく、実際的要求に根ざしたそれを実践した。古文辞学的手続をへて作為の道へ進んだ徂徠に対し、彼は書を止めて生きた現実へと向かった。

既に商工業の藩営論は春台以来多く、それを「天下」全体に拡大した重商主義論が本多利明や佐藤信淵など⁽²⁴⁾にみられる。信淵はいわば当時の経済専門学者で、平田篤胤などの国学の影響を受け国家社会主義的な発想をする。利明は洋学を学び交易の重要性を説き、また社会が未開社会・農業社会・都会と変遷するという一種の経済発展段階説を唱える⁽²⁵⁾。化政期はいわば灯の消えんとする時あたかも炎が明らかになるが如くの状態を呈し、現代の江戸期イメージの源となった。そして幕末に到るが、讓夷・尊王の思想は現時の常識とは

異なり、また勤王・佐幕もどちらが進歩的かというようなことではない。政権を握っている側の方が事情の強制により進歩的たらざるを得なかった。維新も、政権争いが終れば後は、どのような思想的混乱はあれ、実際上の必要に応じた政策を採らざるを得ない。

踐——現代へ

1. 明治維新後には殊に欧米からの思想流入が圧倒的になる。まずイギリス流の自由主義思想が。新政府は事情の強制により資本主義の基本をなす私的所有の法的確認および職業・移転・交易などの自由をもたらしするために束縛を急激に廃止した。これは既に徳川期にかなり事実として拘束力をもたぬ法制的束縛になりつつあり形式的に解除したのみである。近代ブルジョア革命を理想視する錯覚から明治維新を絶対王政の現出ないしは不徹底なブルジョア革命とする見方の論争があった⁽²⁶⁾。ブルジョア革命はおおよそ限界をもち、資本主義の発展に障害となるものを除去する面と役に立つものなら何でも利用する面とをもつ。単に封建遺制として問題が残るのでなく、資本主義体制に組み込まれて残るのである。重商主義も前期と後期に分れ、革命後の後期に本格的な資本の原蓄が進み、産業革命を迎える。典型とされるイギリスの例でも、革命後に国家強制による労働力への強制転化・浮浪者取締りが実施される。幻の革命イメージから明治維新を錯覚してはならない。日本でも維新後民衆の負担は軽くならず⁽²⁷⁾、むしろ一揆はヨリ多く発生する。それは発展の反面であり、逆に例えば「女工哀史」などの現象は女工としての生活が期待できる故生かされるようになったという面も忘れてはならない。エンゲルスの労働者状態の記述などを読む場合にも同様である。この認識がないと事実としての発展によって逆の錯覚に陥る危険がある。おおよそ発展は矛盾の中で起り、発展の故に（「にも拘らず」ではなく）問題が惹起されることの認識が必要である。

資本の原蓄が進み、日清・日露の戦後の産業革命の達成で本格的に資本主義体制の進展となり、社会主義思想も現われる。それより早く自由民権運動は政治運動としてのみならず経済問題として都市では労働者運動へ農村では百姓一揆や小作人運動にも関わる社会思想となっていた。その事跡も最近各地で発掘

されつつある。明治期でもこうだから、まして他に多くの埋もれた思想の可能性があろう。また近時の社会教科書の「侵略」問題の例のように、常に歴史の偽造の試みもある。古代史に限らず日本史全体が常に再検討されていかねばならない。例えば戸籍の充実は国家による収奪強化の意味が濃く、第2次大戦時の配給制により最終的にほとんどの民が編入されるに到り、自由流浪の民は存続不可能になった。また大和民族＝単一民族説が一般化したのもこの前後からである。

2. 経済学は徐々に経世論ではなく純粋な経済（価格等）を論ずる様になり、戦後また大量の欧米思想の流入の後、消化発展も現われつつあるが相変わらず輸入学問の観も強い。経済学の科学としての発展・洗練化の中で、現在むしろ経済学の本来たる政治経済学としての伝統の見直しが、殊に「全体考察」の学としての復活が求められるべきと思う。翻って河上肇⁽²⁸⁾の経済学体系プラン、即ち経済史・現世経済論・経済理論・経済運命論・経済政策という構成は注目すべき点がある。その冒頭には『人類原始の生活』が位置している。

現代は、人間が本来自然の一部にすぎないにも拘らず自然が人間のためにあるとの錯覚が顕著で、自然科学はむしろ社会科学も含めておよそ対象を局部認識する科学への過信がもたらされている。理性の越権を防止せねば、反転して理性の棄権が惹起されかねない。ユートピアは忘れられ、科学化が過進し果ては工学的ユートピアが出現するまでに到る。それは実は人間にとってアトピアである。むしろ科学の有効性が正しく認められれば、その越権も防止されよう。反科学への反転ではなく、批判を経て科学を超えねばならない。科学的認識の権利保証と共にその越権とを防止し、全体考察の学＝形而上学を復活するためには、真正のユートピアの新らたな出現が待望される。——「神が死んだ」現代において悪しき相対論を自覚的に超える視座に、種属としての人類を全体として考察する方法的視座としてのユートピア像の出現が、人類史の傾向から人類史を超えたところに人類史を照射するための社会像が、構想されるべきである⁽²⁹⁾。

課題の一部を素描して一先ず了とする⁽³⁰⁾。各部の深化はむしろ更にアジア諸国の思想との関連に興味を覚える。例えば、中国古代の農本ユートピア思想

たる井田思想、そして現代にも影響する大同思想が検討されるべきである。また殊に日本史再検討には数少ない対照資料である朝鮮史関係が参照されるべきであろう⁽³¹⁾。

(注)

- (1) ノーマン『忘れられた思想家——安藤昌益のこと——』参照。
- (2) 拙稿「政治経済学の批判と労働価値論」『一橋論叢』第70巻第1号及び「労働価値論と人類史」『一橋研究』第1巻第4号等参照。
- (3) アンデルセンの童話「裸の王様」の示す寓意は単に純心な子供の眼には分るということではなく、権威は権威たる故に恥部を露わにしてもよいということで、日本では天皇にその好例が見出せる。また日本（人）論の流行はそれこそ日本人の特色を示すかもしれない。世界には普遍的なことの方が多く、逆にどの国もそれぞれに特殊である。日本と各地方、個人個人の関係も同じである。イロイロアルのが人間である。
- (4) 逆に現在の作品の過少な評価もある。出版洪水の中から優れたものを発掘する労苦が要求される。
- (5) 皇別・神別・藩別など。アイヌ人や琉球人に限らず、日本列島での長期の民族混合の歴史が解明されるべきである。
- (6) 多くの民は文字をもたず穴居生活をしていた。穴居生活がなくなったのは歴史的には最近である。戸籍は徳川期に人別帳となり、明治期に徹底される。しかし近世前に限らず戸籍に入らない民の存在も多かったと思われる。
- (7) 安永寿延『日本のユートピア思想』参照。近世期の「自然ノ世」についても。
- (8) 花田清輝『日本のルネサンス』及び会田雄次『敗者の条件』等参照。また現時の低成長期と少し前の高度成長期の社会状況を比較してみても分る。
- (9) 封建制として停滞イメージをもつ論が多いが、これはヘーゲルが中国を西欧からみて「持続の帝国」とみた錯覚と類似する。むしろ遙かに発展した。徳川期は中世からの連続と近代の崩芽の二面（およそ歴史一般に同じく）をもつ。
- (10) 戦後もそうだが、時代の激動期と思想の大量流入期は一致する。
- (11) 鯖田豊之『戦争と人間の風土』等参照。この意味で法皇と皇帝の関係が天皇と将軍の关系到類比される。個と家の関係も。
- (12) 参考として野村兼太郎『概観日本経済思想史』をあげるに留める。
- (13) 五経の中の経済（政治）の書たる『書経』参照。
- (14) 『大学或問』には断片的な経済論だが、米遣いの論などが展開されている。なお徳川期に箱根の関を境に西は銀遣い、東は金遣いであった意味も重大である。
- (15) 古代には平安時代がそうであり、また最近では高度成長期に既に胚胎されいたはずの問題が今顕在化している例もある。

- (16) 国学には一般に、復古主義と近世合理主義の芽がみられる。古事記などの研究からその世界を理想視し、聖人による作為を否定するというパターンである。
- (17) 丸山真男『日本政治思想史研究』参照。
- (18) 例えば山鹿素行も既に太古の自然を平等状態と観念するが、そこから階級区別の自然的な成立を説くためにすぎない(『山鹿語類』)。また幕儒の林羅山にも(『羅山文集』)。いずれも抽象的で、現実の身分区別は是認する。
- (19) このような大雑把で包括的批判はアカデミズムには不可能であろう。現在昌益全集が刊行中のようだが、在野の研究者によっていることが注目される。
- (20) 拙稿「資本制社会と自由の王国」『一橋論叢』第73巻第5号及び「政治経済学批判と方法的ユートピアの史的考察」『一橋研究』第4巻第2・4号等参照。
- (21) 道徳と人の連合、準理想社会における社会化の問題などが残る。忘れられたのではなく、自ら隠れたのかもしれない。
- (22) その他漢字制限論・カナ文字論なども注目される。
- (23) 現代の中央集権と地方自治の関係の問題の重要性が再認識される。
- (24) 利明『経世秘策』『経済総論』、信淵『経済要録』参照。
- (25) 漢字排斥・カナ文字採用論などもある。
- (26) 前者は講座派で、大別してまた2つの見解に分れ、明治政府を絶対王政そのものとみるものと幕末に多くの近代的要素をみるが逆転して絶対王政の成立に終るとみるものがある。後者は労農派で、政治的に2つに分れ、当時の共産党に代わるものを作らんとするものと自主独立を主張するものがある。また新労農派たる宇野派の見解が参照すべきである。
- (27) 地主からの地租の金納、そして小作人からの地主への物納なども変化はない。
- (28) 杉原四郎『日本経済思想史論集』等参照。
- (29) 拙稿「科学、ユートピア及び批判」『一橋研究』第28号等参照。数千年を経てきた屋久島の縄文杉などの屋久杉や米国のセコイア杉などに何故今傷みが顕わになっているのか、少なくともその一部は遙かに自然・人類の危機を予示しているのかもしれない。欧州でのように人為的に放っておいて保護する自然と日本でどのように人為的に手を入れて保護すべき自然と、いずれにせよもはや自然の保存には人為的な保護を通してしか成立し得ない。それが適切さを欠けば、自然は崩壊が破壊されていくしかない。

古木・巨木は木目(=理)に樹齢を刻み、そこに歴史の厚みを圧縮しているかもしれない。その勢いの度は未来を占わしめる。同様に、方法的に人類史を圧縮し、未来史を照らす試みをしつつある。そして樹木にもまた種属としての人類にも自然死の前の休息を期待すべきものと思う。だが近代の趨勢は人類を含め自然のカタストロフィー的な死滅の危機を蔵しているかとも危惧される。

人類の歴史=社会を「全体として」等距離に見通し、その未来をも照射しうべき基準となる社会像を、科学を超えた次元で構想したいと思い、そしてその像は

必然的にユートピアたらざるを得ないので「方法的ユートピア」と呼んで来ているのだが、本稿は日本の思想史の中からユートピアの構想を抽出することをその任の一つとしたわけである。

- (30) 文字通り「叙述の過程が研究の過程と逆に進む」(マルクス)がどうかはともかく、両過程が同じに進む訳でないことは確かである。研究は従来の理論や思想史などのそれなりの検討の中で自己にとって核心をなすと思われるものを探り、そしてそれなりの核心を基準にして理論をたて思想史を整理したりしていくことになる。その時どこから叙述していくかは場合による。大雑把に言って、研究は特殊から始まって徐々に一般へ向い、体系化をめざす。不断の体系化であって、体系そのものに固定することはないにしても、それなりの体系がたてば、叙述はあたかも一般が先にあるかのようにして各特殊を説明していくことになる。例えば、数学の体系に同じである。それは常識的にそう思われるほど確定したものでなく、それ以上に思想の体系は確定したものではない。研究と叙述の相互の繰り返しの中で、ヨリ深化へと向うはずのものである。およそ叙述は課題の一部のみを果たすものたらざるを得ない。言わんとしたことと言いたこととは同じではない。これは思想を解釈する場合にも留意が必要である。

制度化された経済学においては洗練されその中で業績が生み出され蓄積されているが、例えばマルクスの理論などは本来そのような傾向を拒むはずのものであろうのに、マルクス経済学として一面的に肥大させられているかに思われる。マルクス理論の包容力は大きく、人間と同じようにイロイロアラーなどという方が望ましく、実際多彩な解が存在するのだが、それらを含めたような再び新しい理論が彼の理論を真に活かすために試みらるべきであろう。ささやかながら、しかし氣宇大きく昌益のように大胆に、マルクスを中心にその試みの途上にある。「政治経済学の批判」の意味するものにその広い解の可能性が存するとみる。政治と批判の意味を殊更に張調したい所以については前掲諸拙稿等を参照。本稿はその関連で興味あるものを中心に日本における政治経済論の歴史を概略してみたわけである。

- (31) 大同社会像はマルクスのコミュニズム像と対比するべきである。中国古代からの大同思想は近代に康有為によって再び注目をあび、現代中国にも影響を残す。それと人民公社の理念との関連、そして後者の現実なども検討するべきである。

また欧州などは各国の歴史が相互に資料を対照しあえ検証しあえる可能性が強いが、日本は島国でしかも海流・自然的環境によって入るは易く出るは難の中での歴史で、対照資料が極めて少ない。古来偽史の成立し易い所以である。列島の民族混合の歴史は対照検証が難しいが、その中で殊に朝鮮資料との対照は重要であろう。日本民族の起源としては大陸諸方からの道や南方の諸海上の道を通じて四方から移住した諸民族の混合の中で、朝鮮民族とのつながりが非常に強いであろうことの予想は当然つく。日本史の偽史の解明にも朝鮮を中心とした諸方の資

料との対照が必須である。日本において他国史との対照の可能性が比較的容易になってきたのは、歴史的には極く最近のことにすぎない。

(筆者の住所：〒190-12 武蔵村山市中藤1460 村山アパート92-403)